

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

魔法少女リリカルなのは 罰則の偽り人

### 【作者名】

猫月

### 【あらすじ】

これは海鳴市へやって来た狼少年のお話。

彼はこの町で何に出会い、ぶつかり、認め合うのか。

重たい呪いとそれに比類する力は彼をどこへと導くのか。

この作品は作者の自己満です。ごく都合主義満載です。転生オリエントです。

ユーノ君ヘイト管理局アンチなども含みます。ハーレムになるかもしれません。

完結するかも分かりません。無印開始までまだまだ遠そうです。

作者はハムスターハートで辛口コメは耐えられません。

投稿サイトは初めてなので勝手が分かりませんし、遅筆です。

それでもよろしければどうぞご覧下さい。

サイト作りました <http://ameblo.jp/gekkanoneko/>です。

## プロローグ1 生誕

フランスアルザス地方。

広大な森林と、多くのブドウ畑が立ち並ぶ中にある小さな屋敷。

その小さな屋敷の中に、か細く、でも確かな産声が響き渡った。

「よく頑張ったわレナ!!男の子よ!!」

痛みに汗を流したレナと呼ばれる女性は、息を整えながらも傍らの女性に体を起させてもらおう。

「おめでとう、お姉ちゃん!!」

「はぁ……はぁ……あ、ありがとうリーナ」

支えてくれた妹にお礼を言いながら、レナは母親から産着で包まれた我が子を受け取った。

「この子が…私の子」

泣き続ける赤子を抱きながら、レナは潤む視界の中で我が子を見つめる。

泣きながらも時折見える瞳の色はあの人と同じ深い青。

鼻の形もあの人に似ているだろう。

ちよっぴり生えている産毛は桜色で、自分のストロベリーよりも少し薄い色合いだ。

輪郭はどっちに似ているかは流石に分らないけど、二重でちよっぴりと釣り目気味な目元は自分にそっくり。

そしてなによりも、頭から生える両耳と、産着から飛び出している小さな尻尾。

それが何よりも、この子が自分の子供だと証明していた。

「レナ!!大丈夫か!!」

レナが我が子を見て顔を綻ばせると、慌てて男性が入ってくる。

「はい、ライアさん。私もこの子も無事ですよ」

「レナっ!!よくやった、よく頑張ったぞっ!!」

感極まって泣きそうになりながら、プラチナブロンドの髪をした男性　ライアは、自分の妻を子供ごと抱きしめた。

「ライア兄さん、子供が子供が!!」

「あ、ああっ!!すまん、大丈夫かつ!」

リーナに言われて慌てて離れると、ライアは心配そうに我が子を覗き見た。

「大丈夫ですよライアさん」

「そ、そうかよかった……それにしても、うん。この子は将来可愛い子になるぞ!!」

確信を持って断言するライアに、周りの三人は苦笑する。

「ライアさん。その子男の子ですよ」

「そ、そうなんですか!?!」

レナの母親に言われて、ライアは驚きながらも我が子をまじまじと見つめる。

そしてやっぱり、

「けど、レナに似て可愛い子になりそうな気がする」

そんな彼の発言に、リーナと母親は声を立てて笑い。レナは優しく微笑んだ。

それは少し珍しいけど、どこにでもあるような家庭内出産の風景。

ちょっと違うのはそこには家族しか居なかったことと、母親の家系が夜の一族だということ。

ちょっと困ったのは、クォーターの狼子供が男の子だっていうこと。

そしてとても厄介なことは、家族はまだ気付いていない。



「行ってきます!!」

出かけに掛けられたレナの声に庭先から返事をして、二人はいつものように森へと向かっていった。

「それじゃあ、おかたずけしましょうかね」

二人を見送ると、レナは洗物をしにキッチンへと向かう。

自然な流れで愛用となったエプロンを身に着けながら。

「レナ、二人はもう行ったのかい？」

「ええ。いつもと同じ場所ですよ、ライアさん」

「うつつ…また置いてかれた。それじゃあ行ってくるよ」

「はい。二人をよろしくお願いします」

キッチンに顔を出したライアが、落ち込みながらも二人を追いかける。

三年を過ぎにして、この光景ももう見慣れたものだった。

そう三年。リアンが生まれてからも三年が過ぎていた。

子育てと言つのはとても大変で、あつという間の年月だった。

夜泣きは心配になるほど少なかったが、リアンはとっても臆病だっ

た。

心配になったライアが覗き込めば泣き。

泣き止まそうと妹が抱き上げれば、更に激しく泣いた。

おしめを母が変えようとしても泣き。

レナ自身も母乳を与えようとして泣かれた。

何が不安で、何が怖いのか分からなくって、夜泣き以上に彼女家族を疲れさせた。

きっとレナ一人だったら、それだけで疲れきっていただろう。

ライアや母や妹がいたから何とか耐えることが出来た。

それが終わったのはリアンが生まれてから半年後の事。

疲れきった妹が、耳と尻尾をしまい忘れたまま近づくと泣かなかつたのだ。

あの時ほど安堵したことは、今までになかった。

「本能かな？自分と違う人間の姿に不安だったのかもね」

そう言ったのは夫ライアで、彼だけはその後の半年も泣かれ続けた。

怖がって泣くことが無くなってからは、子育ては比較的楽になっ

た。

リアンはすくすくと成長し、八ヶ月を過ぎる頃にはハイハイと、少しずつ言葉を喋るようになった。

「マンマア」「と初めて言われたときには嬉しくて泣いてしまった。

その次に覚えた言葉が「リーナア」だったときは、ライアが泣いていた。

続けて「ナーナ（おばあちゃん）」「イーア（耳）」「テーウ（尻尾）」だった時にはライアは落ち込んでいた。

そんな彼が近づくと、リアンは泣いてしまうのだから仕方ないけど。

十ヶ月を過ぎる頃にはつかまり立ちが出来るかもと、家族みんなで期待した。

そんな期待を我が子は裏切り、十ヶ月を過ぎたリアンは完全に狼の姿になれるようになっていた。

夜の一族の中でも完全に獣化は珍しく、狼姿で走り回るリアンには手を焼かされた。

一年と少しが過ぎる頃には、我が子も落ち着きを取り戻して、人と狼の姿を意識して変えられるようになった。

その落ち着きようつを見て、

「少し、早熟かもしれないわね」

そう言ったのはお母さんで、実際そうだったのかもしれない。

ライアに相談したかったが、ようやく「ダーデ(父)」と言ってもらえた彼はそれどころじゃなかった。

少し不安だったが、そんな不安をよそに我が子はすすくと成長していった。

つかまり立ち、立ち歩き、言葉の発達など、普通の子供のように。

棚が倒れたり、積んであった皿が崩れたりと、不幸な所は度々あったがそれ以外は特に問題もなく。

リアンが二歳も半ばを迎えると、家族と一緒に外に出歩くようになった。

お気に入りの場所は森の中で、お気に入りの相手はリーナだ。

リアンはリーナの事をリーねえと、私の次に慕うようになった。

それに落ち込んだのはライアだったが、彼は大人になった時こそ!!と前向きになっていた。

尻尾と耳は服の装飾ですよ〜と誤魔化した。

三歳になるとリアンは耳と尻尾を隠せるようになった。気が緩むと現れるけど、外では大分隠せるようになった。

そして今に至る。

暖炉の炎をよく眺めていて、時折謎の本を手に持っている。

たまに辛い夢を見て、泣きながら抱きついてくる。

そんな不思議で不安な所もあるが、リアンはその歳よりも少し落着きのある、良い子に育ってくれたとレナは思う。

「そろそろ大丈夫かな？」

引き出しを開け出したのは、一枚の国際レター。

夜逃げして一族から逃れた母の代から、いまだ付き合いのある数少ない一族のうちの一つ。

同封された写真には、社と呼ばれる場所をバックに、知り合いの夫婦と、母と同じ紫の髪をした小学生の女の子。そしてその手を握って、リアンと同じ歳の女の子が写っている。

「いつか二人の子供と一緒に会いたいね」

そんな約束をした相手。

その手紙の住所はジャパン　そして名前には月村と書かれていた。

## プロローグ2 来日

小さいくせに飛び出したがって、飛び出したがるくせに閉じ籠りたがる。

「本当に、不思議な子だわ」

てこてこ前を歩く自分の甥っ子を見ながら、リーナは呟く。

子供の格好は薄紫のワンピース。

肩まで伸びた桜色の髪がさらさら揺れて、それよりも濃いピンクの耳がピクピク動く。

「って!!リーア、耳、耳!!それが帽子!!」

不思議そうに首を傾げる子供に慌てて白い丸帽子を被せると、

「ありがと、リーねえ」

と答えて、その後でこみえんなさいと頭を下げた。

舌つ足らずで噛み噛みながらのその言葉が可愛すぎて、帽子の上から頭を撫でてやる。

撫でながらも、その可愛さゆえに我が甥っ子の将来がリーナは不安

になってくる。

この子ももう四歳。あと半年もしたら五歳になる。そんなのはあつという間だ。

五歳、六歳と言えばもう幼稚園の時期。おしゃまな子は初恋を迎えると聞く。

まあ恋愛感情と言うものではないが、異性という存在を知り始める時期だ。

それなのに我が甥っ子の姿ときたら

白磁のように白い肌。

さらさらな桜色の髪。

海の底のような深い青色の瞳。

容姿に似合った薄紫のワンピース。

と、可愛らしいことこの上ない。

おらに「どつしたの？」と首を傾げるその姿は、我が甥ながら愛らしことこの上ない。

『本当に...これで男の子なんだから困ったものだわ』

何でもないと答えながら、リーナは日本語で呟く。

少しでも男の子に見えるように男の子らしいズボンを履かせよう

としたが、甥っ子のリアンはそれを嫌がった。

何やら尻尾が窮屈になるのが嫌らしい。

リーナ自身も尻尾持ちなので理解は出来るから何も言えないが、そのため彼の服はほとんどが女の子用の様なワンピースだ。

今日の薄紫の服もその一つで、今も楽しそうに尻尾が揺れて  
：

「ね〜」

「…って、待ってリーア、尻尾、尻尾!!」

猫を見つけて駆けていくリアンを、リーナは慌てて追いかけた。

「あんな可愛いのに男の子やって」

「そっか〜将来は安泰やな」

「男の子?」

そんな二人の姿を、仲の良さそうな親子が眺めて微笑む。

少女の鞆の中で銀のクロスがキラリと輝いた。

魔法少女リリカルなのは 罰則の偽り人 プロローグ2 来  
日

「いつてきまゝす!!」

「はい...ってちょっと待ちなさい!!」

元気よく行って来ますの挨拶をすると、リアンは玄関から飛び出しました。

呼び止める母の声を無視して全力で駆ける。

本当は狼の姿になりたかったけど、森以外でその姿になると怒られるのでやめた。

その家の敷地内から出ると、リアンは走るのをやめて一息つく。

後ろをチラリと見ると、母ではなくリーねえが来ているのが見えた。

よし!!と頷くと、ゆっくりと歩き出す。

今日も逃げ切ることが出来ましたと、心の底で安堵をしながら。

昔から人が嫌いだった。恐れていたと言ったほうが正しいかもしれない。

理由は分からないが、生まれた時からそうだった気がして、ひたすら拒絶の泣き声をあげていた気がする。

祖母も、叔母も、父も、母でさえも恐ろしくて、どうしようもなく泣いていた。

それでも、それなのに、いつまでも諦めない家族の優しさに、恐怖感は消えていった。

それがいつだったのか覚えてないけど、いつの間にか安心して身を委ねられるようになった。

外に歩けるようになると、いつも同じ人が付いてくるようになった。

安心できる人。お母さんのお姉さんらしいけど、お父さんは叔母ちゃんていって言ってた。

よく分かんないけどリーナ叔母ちゃんて呼んだら、凄く喜んだ。

変な寒気がしたからリーバあつて呼んだら怒られた。リーナは嫌って言ったなら、凄く困った顔でリーねえと呼ぶように言われた。

リーねえがリアンってボクの名前を呼ぶ度、凄く嫌な寒気がした。

だからこれも呼び方を変えてくれるように言って、家族の中でボクはリーアって呼ばれるようになった。

リーねえと似てるって言うのと、リーねえは鼻を押さえて上を向いた。

あとズボン嫌い。ワンピースがいいと言ったら、母さんは困ったようにけど丁度言いと言っていた。

いつの日からか夢を見るようになった。

内容は覚えてないけど、本当に嫌な夢。

その夢を見るたびに、辛くって苦しくって母さんに泣きついた。

その度に母さんは優しく撫でてくれて、この時から前よりも人が怖くなくなったけど。

それよりも水面に移った空虚な眼が、時折頭を過ぎるようになった。

大人になってからアレが絶望というモノだと知ったが、その時はただ恐怖した。

四歳になって少し経つと、ボクは両親とリーねえと一緒に遠くに出かけることになった。

両親はボクの小さな世界を広げたいらしい。

意味は分からないけど、凄く嫌な感じがしたから、本気で拒否する

ことにした。

泣きながら断って、狼の姿で森に逃げ込んで、部屋に閉じこもってと、本気で反抗したら、お父さんとお母さんが妥協してくれた。

知り合いの屋敷じゃなく、その敷地内だけど一軒家を借りてくれるって。

それでも嫌だって、布団の中に閉じこもっていたらいつの間にか眠ってしまった。

気が付けば飛行機の中にいた。

眠っていたボクをそのまま連れて来たらしい。

むくれるボクにお父さんは説教をして、お母さんはごめんねと謝り、リーねえは仕方ないねと笑っていた。

ボクは不貞寝をすることに決めて　　凄く凄く怖い夢を見た。

家から出たボクを、知らない大人の人影と知らない子供の影が追いかけてきた。

必死になって逃げるけど、全然逃げ切れなくて。

気付けば転んで、足は動かなくなった。

這いつくばって逃げようにも、動くことは出来なくて　　大人の影がボクの背中に押し掛かった。

息が詰まり呼吸が出来なくなる。どんどん意識が遠のいていく。

意識が遠のいていくのが分かるのに、何故か足に痛みが走った。そして何かを食べるような音。

その音を聞いて　ボクは目が覚めた。

飛行機の中で目が覚めたボクは決心した。

決して、母さんの知り合いには会わない!!と

日本と言う国について泊まる家についてからは、毎日昼は外へと飛び出して、夜は部屋に閉じこもることにした。

だからまだ母さんの知り合いには会っていない。

家を出る時は、敷地の外から振り返るようになった。

付いてきてる人が誰か確認する為。

その人がリーねえだったから、本当に安心した。

だから心から遊びまわることが出来た。

心から遊びまわるところは本当に面白場所だった。

海に、山に、森に。神社の参道は大変だったけど。

忍者も侍も、ボクと一緒に狐もいた。

ここは本当に面白い場所だ。皆何を言っているのか分からないけど。

それでも　ほら、今も目の前に綺麗なアクセサリをしたネコさんが居る。

## プロローグ3 出会い

「いつてきまーす!!」

「はい...ってちょっと待ちなさいっ!!」

レナの制止の声を振り切って、リアンは今日も元気よく走っていき。

海鳴に来てからの毎日の光景だった。

「...しかたないね。それじゃあ、私も行ってくるわ」

「ええ...お願いね」

困ったような顔をするレナに、リーナは苦笑してからリアンの事を追いかけた。

妹の後姿を見送りながら、最近の我が子のことを考える。

フランスに居る時からリアンはこの旅行を嫌がっていた。

てつきり国を出るのが嫌なのだと思っていたけど、そのわりにはこの街を楽しんでいるようだ。

では無理やり連れて来た事に拗ねているのかといえば、リーナに対する態度といいそういうわけでは無さそうだ。

けれど月村の親子とは頑なに会いたがらない。

恥ずかしがっているのではなく、本当に怖がって会いたくないようだから、無理強いする気もなれない。

そのせいで海鳴着いてから一週間経つ今でもリアンを紹介できずにいた。

そのことに対してレナは申し訳なく思う。

「少し早めの反抗期かしら？」

月村夫妻はそう苦笑してくれたが、彼女の娘たちが落ち込んでいるらしい。

会えることを楽しみにしてたぶん、拒絶されたことがショックだった用だ。

(じつじつにかして、一度でも良いから会わせないとね)

心に決めるレナだったがふと頭に迷いが生まれた。

それはリアンの事をどう紹介するかだ。

男の子？女の子？

普通に男の子と紹介したい所だが、狼の耳がばれるとあまりよろしくない。

数少ない付き合いのある綺堂家や母が言うには、狼変化の因子を持つ男は少なく、下手をすると本家に目をつけられるかもしれないとの

事。

昔なじみの月村夫妻はもちろん黙っててくれると約束してくれたが、その子供たちの口を塞ぐのは正直難しい気もする。

そんな会わせてからの難問と、会わせるまでの難問にレナは頭を抱えるのだった。

魔法少女リリカルなのは 罰則の偽り人 プロローグ3 出  
会い

「気持ちいい?」

リアンが訊ねると、答えるようにニヤーと鳴いて頭を摺り寄せてきた。

それが嬉しくて猫の喉を再び撫で始める。

二匹居た同じ模様の猫だったが、一匹は同じじゃなかった。

一匹はとっても穏やかな子、今も撫でられて気持ち良さそうに寝転がっている。

もう一匹はとても賑やかな子で、今は尻尾にじゃれ付いて楽しそうに遊んでいる。

本当はもっと噛んだり舐めたり狼の姿でじゃれつきたかったが、リーナが見ているので出来なかった。

と言っても小一時間ほど遊んでいるので、そろそろ痺れを切らしそうだったけど。

だから撫でるのをやめて、尻尾を動かすのを止めると、二匹の猫は時間が来たのだと分かってくれた。

「頭のいい子だね」

二匹揃ってリアンの前に回った猫の頭を撫でると、穏やかな猫の方が地面に何かの石を置いた。

「くれるの？」

まるでプレゼントの様な置き方だったので訊ねると、先程と同じように答えるように鳴いた。

「ありがとう」

お礼を言って受け取ると、二匹の頭をもう一回撫でてやる。

そしてリアンが立ち上がると、猫たちも分かっている様に去っていった。

「リーねえ貰った！！」

「それは奪ったていう気がするんだけど。」

「貰ったの!!」

リアンが貰ったものを自慢しようとするのと、リーナからはそんな反応が返ってきた。

それに腹が立って、リアンはリーナを置いて走り出す。

「やれやれ」

リーナの溜息なんて気にしない。

「あっ……」

走り出したリアンが足を止めたのは、街中にある公園だった。

多くの子供たちが賑やかに遊ぶ公園。

そんな子供たちではなく、ただ一人、一人ぼっちでブランコに乗っている栗色髪の少女。

彼女の何かが引っかかって足を止める。

何が気になったのか考えて、それが少女の眼だと気づいた時、リアンはもう駆け出していた。

「やあっ!!」

勢い良く突き飛ばすと、少女は後ろに転げ落ちた。

「あっ……」

転げ落ちた慣性で戻って来たブランコは慌てて止めたが、そんなのは後の祭りだ。

リアンが我に返ったときには、栗色髪の少女は大声で泣き出ししてしまった。

何かを言っているようだけど、その意味は理解できなかった。

リアンも慌てて謝ったけど、その言葉は少女には理解できなかった。

そんなこんなでリアンと少女は意思疎通が出来ないまま、彼女は泣きながら公園から帰ってしまった。

「なーに女の子泣かしてるのよ……」

一部始終を見ていたのか、リーナに本気で怒られた。

帰りの間ずっと怒られて、それでも謝っていたことは認めてもらえて。

何で通じなかったんだろうと首を傾げていると、魔法の呪文を教えてもらった。

『ゴメンナサイ』と。

泣かしてしまったことと、絶望に染まっていく瞳が頭から離れなくって、栗色髪の少女のことがリアンは気になって仕方なかった。

母さんにその事を話すと、少し怒られた後に良い事を教えてもらった。

プレゼントと魔法の呪文できっと許してくれると。

リアンは早速次の日に試してみることにしたが、結果は散々だった。

地元の友達にはとっても喜ばれたプレゼントだったのに、見た瞬間に逃げ出されてしまったのだ。

少女が逃げ帰った後には一つ、彼女のツインテールを結んでいた片方のリボンが残されていた。

リアンがそれを拾い上げて、何がいけなかったのか首を傾げていると、やっぱり後ろからリーナがやってきて

問答無用で叩かれた。

## プロローグ 4 妹

なんで私に構うんだろう？

公園の端の芝生の上で、セカセカと何かを準備する桜色の少女を見て彼女は思う。

また嫌な事されるんだろうかと怖くはあったが、アイロンの掛かった昨日落としてしまったリボンと、片言の『ゴメンナサイ』で何となくついてきてしまった。

「!!」

何か声をあげて少女がぱっと振り向く。その瞳には期待の色。

そしてその色は、昨日鼠を渡された時と一緒に、栗色髪の少女はきつく目をつぶった。

「……………」

差し出していた手にはいつまで経っても何の変化もなく、違和感を感じたのは頭の上。

輪のようなものが乗っているのはもしかして蛇だろうか……不安に思いながらも取り外して目の前に持ってくる。

カサカサとした感触に恐々と眼を開ければ、そこにあったのはシロ

ツメクサで出来た花の冠だった。

「これって…私に？」

言葉が いや、身振りが伝わったのか笑顔で頷かれる。

予想外の嬉しい出来事と、

『 『

続けて聞こえた、生まれて初めて貰ったその言葉に、栗色髪の少女

高町なのはは涙が止まらなかった。

魔法少女リリカルなのは 罰則の偽り人 プロローグ4  
妹

「行って…きます」

何処か沈んだ声で家を出てく妹を見送ると、高町家の長男高町恭也は慌てて後を追った。

家族が忙しい中、何でこんな事をしているかというと、妹のなのが苛められているかもしれないからだ。

病院に居る父にも、仕事で忙しい母にも、一緒に手伝いをして  
くれている美由希にも許可は取ってある。

むしろ今まで相手に出来なかった分、しっかりと頼むと頼まれて  
しまった。

「恭也 頼む」

とわざわざ人工呼吸器のマスクを外してまで頼むほど。

父も母も美由希も俺も迂闊だった。

あんなに幼いなのはを放置して、何が大丈夫だというのだろう。

幼い妹の笑顔をいつから見えてないんだろう。

それに気づいた時家族みんなが愕然となり、そして今回の事態に早  
めに気付けたことに安堵した。

なのはの違和感に恭也が気付いたのは二日前だ。

いつものように父の着替えを準備して、簡単な昼ごはんを準備して  
るとなのはが帰ってきたのだ。

その格好はどこか砂まみれで、妹の瞳は赤く充血していた。

「なのははびっぴりしたんだそれ、怪我はないのか!？」

「うん大丈夫　ちょっと……転んじゃっただけなの」

恭也が訊ねるとなのははそれだけ答えて、それ以上訊かれたくないかのように洗面所へと向かう。

一体どんな転び方をすればそんなに汚れるのか。明らかかな嘘だと分かったが、中学生の恭也はどうしようもなかった。

「父さんと母さんに相談してみるか」

とりあえず戻って来たなのはの手当てだけを行うことにして、両親に相談してみることにした。

なのはの事を家族に話すと皆不安がった。

「今日はどうだった？」

夕飯時に美由希がそれとなく、なのはに訊ねたがいつもと一緒と作り笑顔で誤魔化された。

なのはが眠った後に母と美由希と家族会議を行うと、なのはを良く見といてくれと恭也は頼まれた。

次の日も、朝早くから出かけたなのはは昼頃に帰ってきた。

自主休校した恭也の存在に本気で驚いて、慌てて部屋に閉じこもった。

それはあつという間の出来事であったが、彼の眼は誤魔化されなかった。

大切な妹の瞳が再び涙で赤くなっていたこと。

妹の大切にしていたリボンが、片方なくなっていたこと。

この時点で恭也はいじめだと判断したが、さらに閉じ籠った妹の部屋から「お母さんから貰った大切なリボンなのに…」とすすり泣く声を聞いて確信した。

そしてその日の家族会議で、なのはを虐める相手をやっつけることとなったのだ。

そして今。公園の片隅になのはを連れてった少女が一人。

妹はどこか怯えていてそして　泣き出した。

「なのはを泣かせたな!!」

恭也の体は直ぐに動いた。幼い少女だから殴ることはしないが、なのはの前から突き飛ばす。

芝生の上のそこは坂だったため、コロコロと少女は転げ落ちた。

「なのは大丈夫か？辛かったよな、今すぐ仇をとってやるから」

「えっ？えっ？」

何処か困惑気味の妹の涙を指で拭くと、恭也は転がり落ちた少女に近づいた。

「うちの妹を虐めるってことは、覚悟は出来てるんだろっな!!」

眼を回しながら座り込む少女に、二度とこんな事はしないと誓わせる為、強い怒気を放ちながら右手を握りこみ

「ち、違うの!!待ってなの!!」

何故か後ろからなのはに抱き止められた。

「なのは、どうして止める。今も虐められて泣かされてたんだろ?」

怒気を抑えながら抱きつく小さな手を外させると、なのははぶんぶん頭首を横に振る。

そして恭也の事を見上げて言った。

「虐めで泣かされたんじゃないの。嬉しくって…泣いちゃったの。ずっと、一人ぼっちで寂しかった」

「だから…一緒にアソボって言ってくれて…」

「なのは…」

泣きじゃくりだしたなのはの告白に、恭也は何も言えなかった。

「お母さんたちに迷惑かけたくなかったから…ぐすっ、いい子でいなくちゃならなかったの。公園の…みんなも、もう声も掛けてくれなくて…それなのに、また、声を掛けてくれて…一緒にアソボって…ぐすっ、落としてちゃったりボンも綺麗にしてくれて…ずっと、ずっと寂しかったのっ!!」

「そっか…気付けなくってごめんな」

支離滅裂になりはじめたなのはを、恭也はギュッと抱きしめてやる。

父親が怪我をしてからずっと耐えていたのだろう。堰を切って泣き出した幼い妹の頭を撫でながら恭也は反省した。

「リーア!!リーア!!耳!!耳!!」

恭也が芝生の下から聞こえた声に振り向くと、座り込んだ少女に親のような女性が慌てて帽子を被せていた。

そう言えばと、なのはの思いを知る切欠を作ってくれた少女を思い出し、突き飛ばしたことを思い出して冷や汗が流れた。

せつかく出来たなのはの友達が居なくなるんじゃないかと、罪のない少女に怪我をさせてしまったのではないかと。

「なのは、ちょっといいかな?」

泣き止まない妹を少し放すと、今度はなのはと手を繋いで、恭也は芝生の下の子の元へと向かう。

少し情けないがその小さな手から勇気を貰って。

そして、辿り着いた先の少女は

『 !! 』

英語だろうか？何を言っているのかは分からなかったが、何故だかどこか嬉しそうな顔をしていた。

## プロローグ5 平穩で幸せな日々

「いってきまーす!!」

「あ、待って。私も行くよ」

「はい。気をつけて行ってらっしゃい」

リアンとリーナが玄関から元気良く飛び出していく。

こちらに来た時よりもだいぶ明るいのは、三週間前に友達ができたからだろう。

「これなら少し無理しても大丈夫かな？」

けれどいまだに月村親子には紹介できていなかったから、元気に遊びに行く我が子の姿を見てそんな事を考えた。

魔法少女リリカルなのは 罰則の偽り人 プロローグ5 平  
穩で幸せな日々

飛び掛られて、転がって、回っていた世界が落ち着いたら、じゃれついてきた子が心配そうにこちらを見ていた。

その子の手はギュッと小さな手を握っていて、小さな手の持ち主の栗色髪の少女は少し嬉しそう。

泣き腫れたその瞳が、今は澄んだ色をしているようで、リアン自身も嬉しくなった。

「気持ちは晴れたみたいだね!!とっても綺麗な目になったよ!!」

嬉しくって声に出して伝えると、白Tシャツ少年に何故か頭を下げられた。

『!!』

何を言っているのかはやっぱりさっぱり分からない。だから少女を見て、リーナを見上げる。

リーナは何て伝えようか考えた末、

「どうにも、一緒に遊びたかったようですよ?」

と言ってくれた。

ならこれはお願いだろうか。

少年が頭を下げながらの言葉は微妙な発音の英語で、知ってる言葉が混じっている。

「じゅん　ともだち　妹　今から」

そしてじゃれついてきた事から。つまりは　皆で追いかけて

こをしよう!!

そうリアンは理解した。

隣では恭也が頭を下げて謝っていた。

それこそ土下座をしそうな勢いで。それでも立ったままだったのは、ずっとなのは手を握っていたからだ。

なのはそれが嬉しかったから、何も言わないまま握り続けた。

「本当に申し訳ない」とか「恩を仇で返してしまつて」とか一生懸命頭を下げてくれて。

良い子じゃなくて、迷惑をかけてるのに、私のためって分かつて本当に嬉しかった。

こんだけしっかり謝ってるんだからきつと伝わるはず。そう思つてなのはが少女の方を見ると、小首を傾げていた。

あれはきつと伝わってない。なのははそれに気が付いたが、頭を下げた恭也は気付かないままだ。

『

一緒に居た女性がなのはの知らない言葉で少女に話しかける。

それを聞き取った恭也は、言葉の中に英語を交え始めた。

そして　少女の輝かんがばかりの笑顔と共に、

「鬼は誰にする?」

女性の苦笑交じりの声が聞こえた。

「え?」「は?」

高町兄弟の絶句する声が重なる。

それはそうだろう。どうして謝っていて、友達になってと頼んでいて、そんな言葉が返ってくるというのか。

そんな二人の反応に女性は満足したようだった。

「ちっきの事は」の子気にしてませんよ。だから遊んでやってください。友達なんですよ？」

困惑する二人に確りと説明してくれる。

最初から通訳してくれなかったのは、もしかして怒ってたからだろうか。

なのははそう思いながらも少女に手を伸ばして、

「私はなのは。よろしくなの」

「俺は高町恭也だ。よろしく頼む」

兄の恭也は頭を下げる。

「恭也となのは」

女性は少女に何かを伝えて、

「リアア!!」

少女は自分の事を示して言った。

多分それが彼女の リーアちゃんの名前なのだろう。

「よろしく、リアアちゃん!!」

なのはが嬉しそうに名前を呼ぶと、その手をとって返してくれた。

「ヨロシク、ナノナノ!!キョンキョン!!」

不思議な呼び方と共に。

「なのなの？」

なのはが自分を指差すとリアアはこくと頷く。

「キョンキョン？」

次に兄を指差すと再びこくと頷いた。

それが、なのはの初めて出来た友達との出会いだった。

それからの三週間は、なのはの幼い頃の一番幸せな日々だったと言

える。

家に帰れば母が甘えさせてくれて、兄が構ってくれて、姉が本を読んでもくれた。

病院では大分良くなった父が話を聞いてくれた。

外に出れば初めての友達が一緒に遊んでくれた。

リーアちゃんとは未だに言葉が通じないけど、それでも砂場で遊んだり、ブランコ乗ったり、木登りしたり、山で迷子になったり、狐と遊んだり、一緒にするのは何でも楽しくて、なのはは幸せだった。

リーアちゃんと遊ぶといつも良い子ではいられなかったけど。それを叱ってくれて、その後で抱きしめてくれる家族が居て幸せだった。

そして三週間目の最後の日　大好きな父親が自宅療養という形で帰ってきた。

なのははそれが嬉しくて、一、三日の間付つきりになった。

そしてそれ以降、彼女は初めてできた友達の姿を見ることは無かった。